

三条実万の思想形成について

佐 竹 朋 子

はじめに

本稿は、三条実万が行った学習過程から、彼がどのような思想を獲得していったのか考察していくことを目的とする。藤田覚氏は、天保期、御所内で天皇のもとで公家たちが『日本書紀』をはじめとする六国史の会読を行っていた事実について、「日本の政治や社会の仕組みを歴史的に捉え直そうとする動き」と評価し、「天皇を含む公家たちの学問の新たな展開というべきであろう」と指摘した⁽¹⁾。だが、仁孝天皇「御会」⁽²⁾と公家の学問を具体的に検討していくと、藤田氏が指摘したように、六国史を読むことが、「御会」での新たな展開であったとは考えにくい。また、藤田氏の研究では、天保期は、仁孝天皇が在位していたが、光格天皇が寛政期から行った「御会」の連続として捉えられているため、仁孝天皇「御会」の意義が不明となる。しかし、天保十一年（一八四〇）十一月十九日に兼仁上皇（光格天皇）が死去した後、天保十三年（一八四二）二月四日に再開した仁孝天皇「御会」から、天皇、公家らの学問に新たな展開が見られるのである。そして、光格天皇死去後の仁孝天皇「御会」で中心的役割を果たしたのが三条実万であった。

三条実万は、「典故に通曉すること当時第一人者」と称せられ、嘉永期・安政期の朝廷で、朝廷制度改革や、攘夷勅許

問題などで活躍した。⁽³⁾

さらに、実万は、弘化二年（一八四五）に学習院学問所伝奏に任命され、同四年（一八四七）に開講した学習院学問所では、講師の選定といった実務を担うなど、幕末公家社会において重要な役割を果たした人物である。

本稿では、幕末公家社会で右のように影響力のあった三条実万が、どのように学問を学び自己の思想を形成させていったのか、彼自身の日記を素材として具体的に明らかにしていく。それと同時に、天保十三年以降の仁孝天皇「御会」が幕末公家社会にどのような変化を与えたのか明らかにしていく。

一 三条実万とその日記

三条家は、閑院流藤原氏の嫡流家として、左右大臣を官途の上限とする清華家として、摂関家に次ぐ家柄であった。⁽⁴⁾

三条実万は、享和二年（一八〇二）二月二十五日に、父は内大臣公修、母は一條輝良女の第二子として誕生した。そして、文化十一年（一八一四）に、土佐藩主山内豊策女紀子と結婚した。⁽⁵⁾

三条実万が書き残した、書状、記録類は多くある。また、実万は日記を書き残しており、「表1」にある通り、「実万公記」全十一巻と「三条実万公記」全十三巻の二種類の日記が東大史料編纂所に所蔵されている。この両日記は、実万が巻つけたものではなく、東大史料編纂所で巻つけされたものである。⁽⁶⁾

〔表1〕「三条実万年表」（「実万公記」「三条実万公記」東大史料編纂所所蔵／『公卿補任』から作成）

年 号	西 暦	年 齢	官 位	誕生	日記残存状況
享和二年	一八〇二	一歳			
享和三年	一八〇三	二歳			

文化二年	一八〇四	三歳	叙従五位下			文化二年「実万公記」一卷「愚記」七月・八月・十一月、「嚴親御任幕雑記」一二月
文化三年	一八〇五	四歳	叙従五位上			
文化四年	一八〇六	五歳	叙正五位上			
文化五年	一八〇七	六歳	叙正五位下			
文化六年	一八〇八	七歳	任侍従			
文化七年	一八〇九	八歳	叙従四位上	始読書習字ノ事		
文化八年	一八一〇	九歳	叙従四位上			
文化九年	一八一	一〇歳	正四位上			
文化一〇年	一八二	一一歳	正四位上 任右近衛少将	元服		「実万公記」一卷「日記」七月・閏十一月、「中将一件」
文化一一年	一八三	一二歳	正四位上			
文化一二年	一八四	一三歳	正四位上 転右近衛権中将 叙従三位 中将如旧	婚儀之事		
文化一三年	一八五	一四歳	叙正三位 右中将			
文化一四年	一八六	一五歳	正三位 右中将			「実万公記」一卷「日記」十一月
文化一五年	一八七	一六歳	正三位 右中将			「実万公記」一卷 三月二日条（光格天皇讓位記事）
文政一年	一八八	一七歳	叙従二位			「実万公記」二卷「日記」一月・八月
文政二年	一八九	一八歳	従二位	拭眉		「実万公記」二卷「日記」一月・五月・十一月
文政三年	一八〇	一九歳	従二位			「実万公記」二卷「日記」一月・二月・三月・五月・八月・二月八日条・九月
文政四年	一八二	二〇歳	叙正二位 権中納言			「実万公記」三卷 一月一日条、「春日祭参行之間記」二月、「日次記草」七月・九月
文政五年	一八三	二一歳	正二位 権中納言			「実万公記」三卷「日次記草」一月・九月
文政六年	一八三	二二歳	正二位 権中納言			「実万公記」三卷「日次記草」一月

文政七年	一八四二	三三歲	任正二位 權大納言		「実万公記」三卷「日次記草」一月、二月五・二六日条
文政八年	一八四五	二四歲	正二位 權大納言		「実万公記」四卷「日記草」一月・二月・十一月、「備忘雜記」
文政九年	一八六二	二五歲	正二位 權大納言		「実万公記」四卷「愚記」一月・二月
文政一〇年	一八六七	二六歲	正二位 權大納言		「実万公記」五卷「日次記」一月・八月・一〇月・十一月
文政一一年	一八六八	二七歲	正二位 權大納言	息公睦誕生	「実万公記」五卷「日次記」一月・二月・三月、「贈官宣下記」
文政一二年	一八六九	二八歲	正二位 權大納言		「実万公記」五卷「日次記草」一月
天保一年	一八七〇	二九歲	正二位 權大納言		「実万公記」六卷「神宮上卿之記草」
天保二年	一八七二	三〇歲	議奏・正二位 權大納言		「三条実万公記」一卷「武伝代役備忘」春
天保三年	一八七三	三一歲	議奏・正二位 權大納言		「三条実万公記」一卷「武伝代役備忘」春
天保四年	一八七四	三二歲	議奏・正二位 權大納言		「三条実万公記」一卷「武伝代役備忘」春
天保五年	一八七五	三三歲	議奏・正二位 權大納言		「三条実万公記」一卷「覺書斗也」
天保六年	一八七六	三四歲	議奏・正二位 權大納言		「三条実万公記」一卷「武伝代役備忘」春
天保七年	一八七七	三五歲	議奏・正二位 權大納言	二月八日 息実美誕生	「実万公記」七卷「元服雜記」四月／「三条実万公記」二卷、 「武伝代役日誌」春・秋
天保八年	一八七八	三六歲	議奏・正二位 權大納言		「三条実万公記」二卷「武伝東行中代誌」春
天保九年	一八七九	三七歲	議奏・正二位 權大納言		
天保一〇年	一八八〇	三八歲	議奏・正二位 權大納言	九月七日 父公修公死去	
天保一一年	一八八一	三九歲	議奏・正二位 權大納言		「実万公記」七卷「日次記」一月・四月・八月・九月／同八 卷一〇月・二月／「三条実万公記」三卷「日次記」春夏秋冬／ 同四卷「武伝代役日誌」春
天保一二年	一八八二	四〇歲	議奏・正二位 權大納言		「実万公記」八卷「備忘雜記」八月・九月・一〇月・十一月
天保一三年	一八八三	四一歲	議奏・正二位 權大納言		「実万公記」八卷「日次記草」一月、「先君御日記」八月・一〇月
天保一四年	一八八四	四二歲	議奏・正二位 權大納言		「実万公記」九卷「備急雜記」一月・三月・七月・一〇月・ 十一月
弘化一年	一八八五	四三歲	議奏・正二位 權大納言	十一月 學習院學問所伝奏就任	
弘化二年	一八八六	四四歲	議奏・正二位 權大納言		

弘化三年	一八四六	四五歳	議奏・正二位 權大納言			
弘化四年	一八四七	四六歳	議奏・正二位 權大納言	三月	學習院學問所開講	
嘉永一年	一八四九	四七歳	武家伝奏・正二位 權大納言			「三条実万公記」五卷「公武御用日記」夏／同 六卷「公武御用日記」秋冬
嘉永二年	一八四九	四八歳	武家伝奏・正二位 權大納言			「三条実万公記」七卷「公武御用日記」春夏／同八卷「公武御用日記」夏秋、「公用密事」
嘉永三年	一八五〇	四九歳	武家伝奏・正二位 權大納言			「三条実万公記」九卷「備忘愚記」「公武御用備忘」春夏秋冬／同十卷
嘉永四年	一八五一	五〇歳	武家伝奏・正二位 權大納言			「三条実万公記」十卷「教業要録」「備忘雜記」／同十一卷「公武御用日記」春夏秋冬
嘉永五年	一八五二	五一歳	武家伝奏・正二位 權大納言			「三条実万公記」十二卷「公武御用日記」春夏
嘉永六年	一八五三	五二歳	武家伝奏・正二位 權大納言			「三条実万公記」十三卷「私記」八月
安政一年	一八五三	五三歳	武家伝奏・正二位 權大納言	二月一日	息公睦死去	「実万公記」十卷「公武御用備忘」六月・七月、「公武御用備忘介条」八月・一〇月／「三条実万公記」十三卷「陰雜記」五月、「日次記」
安政二年	一八五五	五四歳	武家伝奏・正二位 權大納言			「実万公記」十卷「公武御用備忘」二月／「三条実万公記」十三卷「日次記」三月
安政三年	一八五五	五五歳	武家伝奏・正二位 權大納言			
安政四年	一八五七	五六歳	武家伝奏・正二位 内大臣			
安政五年	一八五九	五七歳	正二位 内大臣 辞官			
安政六年	一八五九	五八歳	落飾			

「実万公記」には、実万が、若年から晩年にわたって記した日記や備忘記が収められている。しかし、「実万公記」一巻から十巻については、「表一」に記した年月の日記や備忘記しか収められていない。そのため、実万が、元々日記が残っている年月しか書き残さなかったのか、それとも、何らかの事情で収められている年月しか現存していないのかは不明である。また、「実万公記」十一巻には、「權中納言拝賀雜事」と「宮司兼任拝賀雜記」との二部の儀式次第が収められ

ている。⁽¹⁾

また、もう一つの日記である「三条実万公記」は、武家伝奏が江戸へ東下中に、武家伝奏代役を務めた期間に書かれた「武伝代役日誌」や、武家伝奏就任期間中に書かれた「公武御用備忘」が収められており、公的な記録が中心に集められた日記であると言えよう。ただし、天保十三年「三条実万公記」三巻には、「実万公記」七巻と同じ「日次記」が収録されており、さらに「嫡孫承祖父母喪ノ事」が収められている。

今回は、実万の思想形成過程を明らかにしていくため、実万が若年の頃からの日記を収めている「実万公記」を中心に分析していく。しかし、書き残された年月日が僅かなため、実万の日記からだけでは明らかにできることが少ない。そのため、同時代の公家の日記を併せて分析し、幕末公家の思想形成過程を出来るだけ一般化した中で、実万の特徴を考察していきたい。

まず、実万の一番古い日記が残されている十二歳から十六歳までを内裏に出仕する上で必要な有識や漢籍の素養を身につける期間として、「教養形成期の学問」として検討を行う。次に、内裏へ出仕し、仕事が本格化する段階に学んだ学問を、議奏に就任する以前と以後とに区分して思想形成期の学問として考察していく。すなわち、十七歳から議奏に就任する直前である実万二十九歳までを「成人期の学問」として検討を行い、議奏就任から学習院学問所伝奏へ就任する前年である実万四十三歳までを「壮年期の学問」として検討を行っていく。

二 教養形成期の学問

(1) 実万教養形成期の学問

実万の残された日記の中で、一番古い記事は、実万十二歳である文化十年(一八一三)七月から閏十一月まで書かれ

た日記であり、おそらく一番始めに書かれた日記と考えられる。すなわち、八歳から読み書きを始め、十二歳で、日記を付け始める段階に至ったと考えられるであろう。例えば、「実万公記」第一巻は、文化十年七月二日条から始まるのだが、数日間を記してみると、

二日 曾我部式部来、易経

六日 山田大学来、百官、村上応助来、辨道

八日 暑中御機嫌出門已刻前、仙洞・中園・押小路・武者小路、曾我部来、易経⁽⁸⁾

と、実万が学んだ侍講の名前とテキストが記述されている。すなわち、日記を書き始めて暫くは、侍講について学問を行った日や、特別な外出があった日のみ記述されている。文化十年に書き残された四ヶ月間の日記は、総て右のような記述であり、侍講について学問を行った日とテキストを表にしたものが、「表2」である。

〔表2〕の期間で、実万が一番多く学んだ人物は、山田大学以文である。山田大学以文は、国学者藤貞幹の弟子であり、有識に優れた人物であった。⁽⁹⁾ 山田以文は、三条実万だけでなく、野宮定静、定祥、定功と、野宮家三代にわたって侍講として招かれ、橋本実麗の侍講も行っていた。また、その有職に関する知識が認められてか、宮中に装束師として出入りしていた。実万は、その山田以文から「百官」、「内裏式」、「作法故実」を学んでいた。つまり、内裏に出仕する上で必要な有職の知識を学んでいたのであろう。

また、曾我部式部からは『易経』と、途中から同時進行で『古文孝経』を学び、『古文孝経』が終わってからは、『論語』を学んでいた。また、村上応助からは、『辨道』を学んでいた。曾我部式部や、村上応助らの身元は不明だが、おそらく、当時、京都で名の知れた儒学者であったと考えられる。⁽¹⁰⁾そして、例えば、同年八月四日条には、「曾我部式部来、古文孝経講釈⁽¹¹⁾」とあり、その他にも曾我部式部から漢籍を教授される際は時々「講釈」と記されている。

次に、実万が行った学問について記されているのは、文化十三年（一八一六）、実万十五歳である。そこでは、同年十一月一日条に、「濱崎民部権少輔来、会読三中口伝⁽¹²⁾」と、記され、濱崎民部権少輔と、『三中口伝』を「会読」したとある。また、同年同月八日条に、「曾我部来、読書詩経、講釈論語⁽¹⁴⁾」とあることから、曾我部式部との学問を続けており、曾我部から、『詩経』の「読書」と、『論語』の「講釈」を受けた。

しかし、山田大学や曾我部式部、村上応助ら侍講についた学問は、文化十三年以降は記されていない。また、文化十四年（一八一七）は、三月に譲位した光格天皇の記事が中心の日記しか残されていない。そのため、侍講を招き内裏に出仕する上で必要となる有職や漢籍の素養を身につける学問が、いつまで続いたのかを正確に明らかにすることはできない。

ところが、実万は、文政一年（一八一八）に、光格天皇にかわり即位した仁孝天皇「御会」に出席し始める。そして、「御会」出席を契機として、実万の学問に新たな段階が見られる。そのため、教養を身につける学問は、「御会」出席前に終了したと考えられる。そこで、実万の十七歳以降の学問については、思想形成期の学問として、次章で検討を行う。

（2）幕末公家の教養形成過程

次章に移る前に、実万と同時期の公家である野宮定祥や、野宮定功を例として、公家の教養形成期の学問を検討して

いく。そして、三条実万と比較することで、実万が行っていた教養形成期の学問の特徴を考えていきたい。

野宮定祥は、定祥が十二歳の文化八年（一八一）正月から日記が残されており、学問に関する記事は、定祥が十四歳の文化十年（一八一三）から記されている。

さて、「定祥卿記」文化十年七月十八日条に、

此日、山槐記節会儀及元日節会□類可令書写令命家公給、仍從今日令書写⁽¹⁵⁾

とあるように、父である定静から『山槐記』の「節会儀及元日節会」を「書写」するように命じられ、今日から「書写」を行うとある。また、同年同月二十一日条には、

此日、山槐記書写之事畢、仍家公江献了⁽¹⁶⁾

と、定祥が、父定静から命じられていた『山槐記』の「書写」が終わり、定静へ提出している。この文化十年（一八一三）七月以降、定祥が、書写を行う儀式書は、『山槐記』の他に、『人車記』や、『本朝世紀』の「賀茂祭条」や「春日祭条」の抜粹、「類要抄」の「衣服部」の抜粹、さらに、「経俊卿記」の「賀茂祭条」や、「実躬卿記」の「弘安五年十月」等多岐に渡るが、いずれも当時、宮中で行われていた年中行事であった。すなわち、父定静は、息子定祥へ儀式書を「書写」させることで、宮中で行われる年中儀礼に対する知識を身につけさせようとしたと考えられる。つまり、定祥は、元服が済み、内裏に出仕しだした段階では、儀式書の書写から始めたのである。このような学問は、定祥が十六歳になった文化十二年（一八一五）七月まで行われ、翌月、山田以文が侍講として定祥を訪れるようになると、父からの指導記事は記載されなくなる。つまり、定祥の学問指導は、父定静から侍講である山田以文へと移ったことがわかるのである。そして、「定祥卿記」文化十二年八月八日条には、「山田伊豆来、読十八史略⁽¹⁷⁾」とあることから、山田伊豆守以文との勉強会は漢籍の講読から始まったのである。以降、山田以文とは、ひと月に四回から六回程度、『十八史略』や『孟

子』、『延喜式』をテキストとして、講読が行われた。また、同年四月二十八日条から、中山忠頼亭で開かれた『西宮記』を「会読」する勉強会にも出席し始めた。定祥の母は、中山忠愛の娘という関係から参加したのであろう。つまり、父定静のもとである程度の教養を身につけた上で、山田以文から漢籍を学び、他家で開かれた儀式書の「会読」会へ参加し始めたのである。

野宮定功は、十五歳となった文政十二年（一八二九）から日記が残されている。この年に、定功は元服し、従五位下に任じられた。そして、「定功卿記」文政十三年（一八三〇）七月二十二日条に、「以文阿波介来、会読江次第⁽¹⁸⁾」とあるように、山田以文を侍講として招き、学問を教授された。だが、文政十三年（天保一年）は、学問に関する記事は、七月二十二日条、十月二日条、十一月七日条と三日間しか記されていない。また翌年は、天保二年二月一日条に、「山田以文来会⁽¹⁹⁾」と記されるのみで、実際に学問を教授されたかどうか詳しいことはわからない。しかし、天保三年（一八三二）からは、山田以文との学問に関わる記述が詳細になる。すなわち、天保三年七月十七日条に、「山田以文来会、見大内裏考証⁽²⁰⁾」と記され、以後、ひと月に三回から五回、山田以文から教授を受けている。そして、山田以文に『江家次第』や『大内裏図考証』といった儀式書をテキストとして学んだことから、内裏に出仕する上で必要な有識の知識を教授されたといえよう。さらに、以文の息子である藤原有孝を侍講として招き、有孝から『十八史略』の講読を教授されたのである。

「定功卿記」は、定功の十五歳から始まっているため、侍講から教授される以前の学問を知ることとはできないが、定功も、父定祥から指導を受けた上で、侍講について学問を行ったと考えられる。

以上から、野宮定祥や定功は、まずは父の指導を受け、儀式書を書写することから儀式に対する基礎知識を身につけていった。その上で、内裏へ出仕し出す頃から侍講を招き、有識や漢籍の素養を学んだのである。

野宮定祥・定功親子と三条実万の教養形成過程と比較してみると、実万は、十二歳から有識と漢籍の素養を教授する侍講を三人も招いており、かなり早い速度で学問に励んだことがわかるのである。

三条家と野宮家の知行高は、三条家は二六九・五石、野宮家は一五〇石であった。そのため、三条家は野宮家に比べ侍講を雇う余裕があったとも考えられる。⁽²¹⁾しかし、それ以上の違いは、家格による昇進の速度である。野宮家は近衛の中・少将に任ぜられる羽林家であり、定祥は、文政七年(一八二四)、二十四歳で左近衛権少将となった。定功は、天保三年(一八三二)、十八歳で侍従となり、天保九年(一八三八)、二十四歳で右近衛権少将となった。

それに比べると、実万は、四歳で従五位下となり、七歳で侍従に任じられ、十三歳で従三位中将へと昇進していた。しかし、実万だけが特別に早い昇進ではなく、父公修も、天明五年(一七八五)、十二歳で従三位中将へと昇進していた。つまり、清華家として当然の昇進であった。⁽²²⁾実万は、そうした事情から早い時期から侍講を招いて学問に励んだのである。そして、清華家では、実万と同じような速度で、教養形成期の学問が行われていたのであろう。すなわち、公家は、家格によって昇進の速度と、官途の上限が決まっていたため、三条実万と野宮定祥・定功との学問開始時期に差が生じたのは、家格が違うからである。

以上の検討から、公家の家格と学問開始段階とは密接に関わっていたことがわかる。さらに、野宮定祥の日記を見る限り、侍講について学問を始める以前は、父親が学問の指導を行っていた。三条実万の日記には、十二歳以前の記録がないため、八歳から読書を始めた実万が、十二歳まで誰の指導で、どのような学問を行ったかは知ることができない。しかし、父公修が死去した際に書かれた「中陰中日記」には、父から教導を受けたという記述があることから、恐らく父公修から指導を受けていたのであろう。⁽²³⁾また、笹部氏の研究によると、実万の息子実美は、三条家家士の富田織部が教育係であった。すなわち、教養形成期は、父親か、父親がわりとなる側近の指導で、基礎知識を身につけ、元服し内

裏に出仕しだす頃、侍講から内裏に出仕する上で必要な有職や漢籍の知識を教授されたのである。

次章では、侍講についた学問を終えた実万が、どのように学問を行っていくのか明らかにしていく。

三 思想形成期の学問

(1) 成人期の学問

本章では、実万が思想形成期において、どのように学問を行っていたのかを明らかにする。

まずは、実万が、十七歳の文政元年（一八一八）から、議奏に就任する直前である二十九歳の天保元年（一八三〇）までを「成人期の学問」として検討する。但し、この時期は、「表一」にある通り、日記が残されている月が少なく、一年を通して実万が学問を行った実態を明らかにすることは出来ない。そこで、数少ない記述から、実万の学問の特徴を捉えていきたい。

さて、文政元年八月二日条に、

曾我式部来、貞観政要会読也、是禁中有御会之故也⁽²⁶⁾

と、実万が、三条亭にやって来た曾我式部と「貞観政要」の「会読」を行い、宮中で開かれていた「御会」に出席するための予習を行っていたことがわかる。また、同年同月四日条では、

次向葉室家、政要読合也、亥刻此帰了、曾我部来会也⁽²⁷⁾

と、葉室家へ出向き「貞観政要」を読合せたとある。つまり、実万は、葉室家に出向いて、「御会」のテキストである『貞観政要』の読み合わせを行い「御会」に備えたのである。

以上の記事からは、文化十四年（一八一七）九月に即位した仁孝天皇の「御会」が、翌年八月には開かれていたこと

が知られる。しかし、実万の日記が、文政元年は、一・八月しか残されていないため、仁孝天皇が即位した後、いつから「御会」が開かれていたのかなど、仁孝天皇「御会」の開始直後の様子を知ることとはできない。また、実万がどれくらいの割合で「御会」へ出席していたのかなど、実万が「御会」へ参加した具体的な様子も知ることは出来ない。

しかし、実万が、侍講についた勉強会において有識や漢籍の基礎知識を身につけたうえで、宮中で行われていた仁孝天皇「御会」へ参加し始めたと考えることができる。なぜなら、先ほど紹介した野宮定祥や定功が、教養を身につける学問が一段落ついたあたりから、天皇の「御会」に出席し始め、「御会」に出席すると同時に、公家同士で「御会」の予習のための勉強会を行っていたからである。⁽²⁸⁾ただし、実万が、早い時期に教養を身につけていたとしても、十七歳で天皇の「御会」へ参加するというのは、異例の早さであったといえる。⁽²⁹⁾ちなみに、大塚武松氏は、「公は先帝と御同年にて殊に御愛臣なしりかは」と記されており、実万は仁孝天皇の側近となるべく年若くして「御会」への参加を許されたと考えられる。⁽³¹⁾

また、実万は、他家で開かれていた自主的な勉強会へも参加し始め、学問の場をさらに広げていく。例えば、文政元年（一八一八）八月六日条には、「黄昏向葉室家史記会也管晏列傳⁽³²⁾」と、葉室家で開かれていた「史記会」へ参加していた。また、文政五年（一八二二）九月三日条には、「竹屋へ行向、北山抄爲読合也、自先月始也⁽³³⁾」とあって、竹屋亭で、竹屋光棟と『北山抄』の読み合わせを先月から始めたことがわかる。さらに、文政七年（一八二四）一月二十六日条には、

晴午剋後、清水平八来、読始前漢列伝、小倉黄門口入、今日所門入也（中略）以後二七日可来約諾⁽³⁴⁾
と、小倉黄門豊季の「口入」で、清水平八という侍講を招いての『前漢列伝』の講読を行い始め、以後、「二七日」に行う約束を取り付けたのである。

有識や漢籍に優れた公家や侍講を招いての勉強会は、幕末に限らず近世を通じて開かれていた。しかし、公家社会では、家格や門流が厳しく、公家同士の交際関係が決まっていたため、そのような勉強会へ参加するには、同じ一族であるか、縁戚関係といったつながりが必要であった。ところが、実万は、学問のためには、他家で開かれていた勉強会へ積極的に参加し、学問的興味が同じ公家同士で勉強会をおこなすなど、学問を通じた交流を深めていたのである。仁孝天皇「御会」へ参加し始めたことで、同じく「御会」に参加していた公家らと学問を通じてのつながりが培われたからであろ⁽³⁵⁾う。

実万は、以上のことから、この時期には、宮中で開かれていた仁孝天皇「御会」へ参加し始め、自ら学問を行う場を求めて他家で行われていた勉強会へも参加し始めたことがわかる。そして、侍講に止まらず、公家同士で学問を行うなど、学問の場を広げていたのである。

(2) 壮年期の学問

実万が、天保二年（一八三一）、三十歳で議奏に任命されてから、武家伝奏へ就任する前年である弘化四年（一八四七）、四十六歳までを「壮年期の学問」として明らかにしていく。

実万は、三十歳で議奏に任命されるという拔擢を受けた際⁽³⁶⁾、

不学短才之義ハ元Y上々明鑑被為在被仰付候義申迄も無^{却而如何ニ有之}之候へとも、誠明君無捨士ト申^{弄棄歟} 聖君之恩愛ト相心得候得^{典故}は、量才居職候は人臣之道とも相心得候、勿論投身命竭奉公之節候⁽³⁷⁾

と、「不学短才」であることは言うまでもないが、「明君無捨士」という言葉は、「聖君」の「恩愛」と心得るので、「量才居職」は「人臣之道」とも心得え、命をかけて議奏の職務に邁進する決意を述べている。

実万が、議奏に就任した天保二年（一八三二）から天保十二年（一八四二）までの間、学問の記述などを記した日記は残されていない。「表一」を見ると、実万が議奏に就任している時期に書かれた記録として、天保二年の「実万公記」六巻に収められている「神宮上卿之記草」と、天保八年の「実万公記」七巻に収められている「元服雜記」があるが、出役した儀礼を先例として後世へ書き残すためや、息子公睦の元服を書き残す目的の記録である。⁽³⁸⁾

また、「三条実万公記」には、天保四年から天保八年と、同十年に書かれた日記が収録されているが、天保六年に書かれた「覚書斗也」以外は、すべて武家伝奏が江戸へ東下している際、実万が武家伝奏の代役を勤めたときに書かれた「武家伝奏代役日誌」である。また、「覚書斗也」の内容は、賀茂社の祭祀や修学院についてなど、先例として書き残す必要があると判断された内容が記されているのみである。また、天保十一年九月七日に、父公修が死去した。そのため、実万は当主として葬送儀礼や法要を営み、その様子を記録している。⁽³⁹⁾

実万の日記に学問の記事が登場するのは、「三条実万公記」天保十三年（一八四二）八月二十六日条の「池内大学来、論語講義如例」⁽⁴⁰⁾からである。天保十三年八月は、二十三日以降の日記しか残されていないが、「論語講義」が「如例」と書かれていることから、八月以前から「講義」を受けていたと考えられる。そして、翌九月には、十五日条、二十日条、二十五日条と、同じく池内大学から「論語」の「講義」を受けていたことがみえ、同年十月五日条にも同様の記事がみえる。右の事実から推察すると、実万は、天保後期に、ひと月に数回、池内大学から「論語」の「講義」を受けていたと考えられる。また、「実万公記」天保十五年八月三日条には、「於家中有論語講義、室谷亮長来」とあり、さらに、同年同月七日条には、「室谷亮長来、講論語」とある。⁽⁴²⁾すなわち、池内大学から「講義」を受けた後に、室谷亮長⁽⁴³⁾からも「論語」の「講義」を受けていたのである。

実万は、天保期、議奏としての職務や、武家伝奏の代役を務めるなど多忙な時期であった。そのような中、池内大学

と室谷亮長という二人の知識人から『論語』の「講義」を受けていたのは、議奏就任以前に、内裏へ出仕するために有識や漢籍の素養を身につけようとしていた段階とは違い、実万が自らの意志で漢籍を学ぶ必要性を自覚したからなのである。

また、天保後期の京都には、多くの知識人が公家に入説を計ろうと上京していた。⁽⁴⁴⁾ そのような時世の中で、実万が、議奏という職務につき、朝議に参画できる立場であつたため、池内大学に限らず、多くの知識人が実万の元へ入説のため集まってきた。例えば、『実万公記』天保十三年八月二十六日条には、

近来去年、從関東所上京儒伯州之人云々、影山禮太郎年齡廿六才、開學業森寺若狹守入彼門、以其由緒当家ニ来所望之旨申之、無用之家来、売名目之類甚不庶幾、然而非常人為儒士之間為三位中将教導可召遣之條為便宜歟、且彼人物随分為篤実歟之旨承之、専長門守吹家来之義行状了、今日初所出仕也、予三位中将等面会、予賜口祝献扇一箱肴一折料金百疋、又予於別所面之談儒學之事、関東林家三年許随從云々⁽⁴⁵⁾

と、関東から上京した伯耆国出身の儒学者である影山禮太郎という人物が、三条家諸大夫である森寺若狹守常安との由緒を口実に、三条家に仕官を求めてきた。実万は売名目的と感じたが、「儒士」として優秀なので、息子公睦の「教導」として雇い入れた。さらに、実万は、影山禮太郎と、「別所」で「儒學之事」を談じ合った。影山は、幕府の儒家である林家へ三年「随從」したということである。すなわち、実万は、「幼年期」や「成人期」までは、公家お雇いの知識人や、公家同士で勉強会を行っていたが、「壮年期」の学問では、入説をはかってくる様々な身分の知識人らとも交流を深め、彼らを息子の教導のために雇い入れていたのである。実万は、漢籍を学んでいたこともあって、儒學に優れた知識人に、特に興味を示し、日記にも記述したのである。

以上、三条実万の日記に記された学問についての記述を中心に、実万の教養形成期の学問から、成人期、壮年期と実

万が思想を形成させる時期の学問を紹介してきた。教養形成期や成人期までの実方は、昇進するに従い、学問の場を広げていった。それは、内裏に出仕し、職務を行う上で、有識などの必要な知識を得ていくためであった。すなわち、実方の学問は、昇進や仕事と深く結びついていたと指摘できる。そして、壮年期には、実方は、それまで行っていた公家お雇いの知識人や、公家同士での勉強会といった枠を越えて、入説をはかってくる様々な身分の知識人らとも交流を深めていったのである。

ところで、天保十一年（一八四二）、兼仁上皇（光格天皇）死去後、仁孝天皇は、天保十三年に再開される「御会」を充実させ、リーダースhipを発揮しようとしていた。そうした中で、仁孝天皇の「御会」の中心的存在となったのが、三条実方であった。そこで、次章では、兼仁上皇死去後の宮中で再開された仁孝天皇「御会」について検討したい。

四 仁孝天皇「御会」

仁孝天皇の父である兼仁上皇は、文化十四年（一八一七）から天保十一年（一八四〇）に及ぶ長期の院政を行った末に、天保十一年（一八四〇）十一月十九日に死去した。その後、葬送儀礼などのため、一時中断していた仁孝天皇の「御会」が再開する。すなわち、「定功卿記」天保十三年二月四日条に、

宮中御読、一昨年冬以来中絶、自今日被始云々、続紀御会己亥日、通鑑綱目御会丑未日云々⁽⁴⁶⁾

と、「己亥日」には和書である『続日本紀』をテキストとした「御会」が開かれ、「丑未日」には漢籍である『通鑑綱目』をテキストとした「御会」が開かれるよう定められたのである。そして、仁孝天皇は、「御会」再開以降、積極的に「御会」において自らの方針を示していた。

例えば、「定功卿記」天保十四年（一八四三）六月四日条には、仁孝天皇は、昨年冬、「和御会」は『続日本後紀』を

テキストとして用いるとの仰せであつたが、先に『日本逸史』を用いることを更に仰せ下されたとある。定功はその際、「御会」に「近代之作」であり「殊抜粹之物」を用いることについて思いも寄らないことであるとの感想を述べている。また、当時の宮中では、天保十一年冬に、関白鷹司政通の命により行われ始めた『日本後紀』の校合作業が、広橋光成・野宮定祥・東坊城聡長・中山忠能らによって行われていた。⁽⁴⁸⁾つまり、有識の書物に通じた一部の公家らが「御会」に用いる『日本後紀』の校合作業を行う一方で、「御会」では、鴨祐之が散逸していた『日本後紀』を復元するために編纂した『日本逸史』をテキストとすることで、「御会」に参加する公家に対して原本に忠実な意識を学ばせようとしたのである。

その結果、「実麗卿記」天保十五年六月十二日条には、

丁未、晴巳刻参内当番也、直宿仕、從今日続日本後紀古写本同卷物并新刻本寛政板等倭御会参上之輩可校合之旨被申渡、三条大納言春宮権大夫、三位中将被参仕、自余当番、新平^(正)三位内藏頭、予等也、第一卷校合了⁽⁴⁹⁾

と、今日から、『続日本後紀』の「古写本」や「同卷物」、「新刻本」や「寛政板」等を、「倭御会」に参加する者で「校合」するようにとの申し渡しがあつた。三条実万や息子である三位中将公睦が「参仕」した。「余」から「当番」であり、正三位内藏頭の山科言成と実麗等が「当番」である。「第一卷」の「校合」が終わつたとある。そして、実麗は、右の記事以降、同年同月十四日条に、「午刻事了、直参内、続日本後紀校合御用、酉刻退出⁽⁵⁰⁾」とあるように、内裏で『続日本後紀』の「校合御用」を勤めたのである。つまり、『日本逸史』が終了した後の「御会」からは、今度は「倭御会」に参加していた公家が、当番で校合作業を行っていくようになったのである。

そして、「実万公記」天保十五年（一八四八）八月二日条には、

今日、続日本後紀御会開卷也、日野前亜相、予、広橋中納言、橋本中納言、近臣人々濟々参上、此三位中将同参入、

先達以来官本古卷冊等二部有之以之、被校合刻本、又人々申請校正⁽⁵¹⁾とあり、『続日本後紀』「御会」の「開卷」にあたり、日野資愛、実万、広橋光成、橋本実麗、「近臣」の人々が参上し

た。実万の息子である三位中将公睦も同じく「御会」へ参った。先日以来、『続日本後紀』は「官本」と「古卷」の「二部」を基にして「校合」し、「刻本」を作成した。そして、「御会」参加者で、「校正」したとある。つまり、「御会」参加者で、『続日本後紀』の「官本」と「古卷」を基に、さらに多くの書物を参考に校合を行うことで、原本に忠実なテキストの作成を目指したのである。

実万は、先例に造詣の深い人物であったため、以前から日記には、古記録類への関心を示す記述が散見していたが、天保十三年（一八四七）以降、儀式の在り方や、古代や中世に書かれた古記録類が、正確に筆写され残されている写本であるかどうかや、どこに所蔵されているかについて、関心を示す記述が特に増すのであった。それは、実万の関心が増したというよりは、宮中の「御会」で校合作業を行うなかで、古記録類の情報を得ることが必要となったからであろう。さらにいえば、天保十三年以降の仁孝天皇「御会」にみられる、原本に忠実であろうとする考え方は、実万が儒学の学習を通じて獲得した実証主義的精神が「御会」に持ち込まれたからだと考えられるのである。

最後に、仁孝天皇「御会」が、「御会」に出席していた公家にどのような影響を与えたかを、橋本実麗の日記である「実麗卿記」を例として検討したい。

橋本実麗は、文化六年（一八〇九）に生まれ、文政十一年（一二二八）四月、二十歳で侍従に任命された。⁽⁵²⁾「実麗卿記」は、侍従に任命された年から始まっており、学問の記事が散見する。その記事を表にしたものが、〔表3〕である。

〔表3〕「橋本実麗学問記録」(「実麗卿記」(東大史料編纂所所蔵)から作成)

実麗卿記一巻	年 号	西 暦	実麗年齢		テキスト	回数
	文政一一年(夏秋冬)	一八二八	二〇歳	山田以文亭 中山忠能亭	「有会」(テキスト名なし) 「鈔抄」会説	一二回 三回
実麗卿記二巻	文政一三年春	一八三〇	二二歳	山田以文来	『日本書紀』会説	一回
実麗卿記三巻	天保八年	一八三七	二九歳	裏辻公愛来	『江家次第』会説	一回
実麗卿記四巻	天保九年	一八三八	三〇歳	「会」記述なし		
実麗卿記五巻	天保一〇年	一八三九	三一歳	正親町実徳来 西園寺亭	『江家次第』会説 書写	一回 一回
実麗卿記六巻	天保一三年	一八四二	三四歳	仁孝天皇「御会」 山田豊前介有孝(藤原有孝)亭 西園寺師季亭 西園寺亭	『続日本紀』 『日本書紀』・『続日本紀』会説 「会説」(テキスト名なし) 書写	二回 一回 一回 二回
実麗卿記七巻	天保一四年	一八四三	三五歳	仁孝天皇「御会」 徳大寺公純・野宮定功・万里小路正房・藤原有孝 ・中山忠能 徳大寺公純・野宮定功・藤原有孝 西園寺師季亭	『日本逸史』 『日本逸史』・「御会」予習会 『続日本後紀』・「御会」予習会 『江家次第』	一二回 一六回 一回 四回
実麗卿記八巻	天保一五年	一八四四	三六歳	仁孝天皇「御会」 仁孝天皇「御会」校合御用 徳大寺公純・野宮定功・中山忠能・万里小路正房 徳大寺公純・野宮定功 東宮御会	『日本逸史』 『続日本後紀』 『続日本後紀』校合 『続日本後紀』・「御会」予習 『人車記』校合 『江家次第』会説	七回 六回 七回 三回 一回 一回
実麗卿記九巻	弘化二年	一八四五	三七歳	仁孝天皇「御会」 中山忠能・徳大寺公純・野宮定功	『文徳実録』 『三代実録』校合 『三代実録』校合	四回 八回 八回

美麗卿記一〇巻	弘化三年	一八四六	三八歳	徳大寺公純・野宮定功 中山忠能・徳大寺公純・野宮定功 西園寺亭 徳大寺公純・野宮定功	『文徳実録』『御会』予習会 『三代実録』『御会』予習会 『人車記』校合 『会説』(テキスト名なし)	一回 五回 二〇回 一回
美麗卿記一一巻	弘化四年	一八四七	三九歳	西園寺亭 徳大寺公純・野宮定功 徳大寺公純・野宮定功 学習院学問所「漢書会」	『江家次第』会説 『人車記』校合 『例会』(テキスト名なし) 『大学』『論語』	四回 二〇回 三回 六回
美麗卿記一二巻	弘化五年	一八四八	四〇歳	学習院学問所「漢書会」 西園寺亭 徳大寺公純・野宮定功 徳大寺公純・野宮定功	『人車記』校合 『玉海』校合 『会説』(テキスト名なし) 『論語』『書経』	九回 二回 三回 七回

橋本美麗が仁孝天皇「御会」へ出席し始めたのは三十四歳の時で、天保十三年(一八四二)七月二十九日条に、「直宿仕、未半刻斗召御前、続日本紀三十四巻御会⁽⁵³⁾」とある。これが初出の記事である。つまり、仁孝天皇「御会」が再開して以降に参加し始めたことがわかる。そして、仁孝天皇の「御会」への参加以降、〔表3〕にある通り、学問を行う記述が急激に増えていく。

例えば、天保十四年(一八四三)には、『日本逸史』をテキストとした「和御会」へ十二回参加している。そして、この年から、「御会」に出席するための予習の勉強会を、同じく「和御会」に出席していた野宮定功、徳大寺公純、万里小路正房らや、時には山田以文の息子である藤原有孝も同席して行い始めた。また、天保十五年には、『続日本後紀』を「倭御会」参加者全員で校合することとなったが、美麗は、その他に、「倭御会」の予習の勉強会を行っていた野宮定功らと共に、『人車記⁽⁵⁴⁾』の校合作業を私的にに行い始めた。右の事実からわかるように、天保十三年以降は、それに比べて、学問

に関する記述が格段に増しており、実麗や彼と共に学問を行っていた公家らの勉強熱が急速に高まっていたことがわかるのである。⁽⁵⁵⁾

すなわち、再開後の仁孝天皇「御会」では、有識に優れた一部の公家だけでなく、「御会」に参加するすべての公家に対して儀式書を校合できる知識が求められたのである。そして、「御会」で扱うテキストに対して、より厳密さを求めて校合を行うという姿勢が、公家へも浸透した結果、公家らが、自主的に儀式書の校合作業を行い始めるなど、公家の勉強熱がさらに高まったことがわかる。

その後、仁孝天皇「御会」の影響から、天保後期に高まった公家社会の勉強熱を背景として、仁孝天皇の希望で、学習院学問所が設立されることとなった。そして、弘化二年（一八四五）十一月二十七日、学習院学問所伝奏に任命された実万は、弘化四年三月九日の開講にむけて、有識に優れた公家や、それまで培ってきた知識人との人脈をいかして、学習院学問所講師を採用していくのである。⁽⁵⁶⁾

おわりに

以上、実万の日記を通して、実万が学問を修得していった過程を考察した。実万は、教養形成期に、侍講から有識と漢籍の素養を教授された。そして、光格天皇の讓位に伴い即位した仁孝天皇「御会」に出席し始めたことによって、教養形成期の学問を終え、他家で開かれた勉強会へも参加し始めることで学問の場を広げていった。そして、議奏に就任し職務が多忙となるなかで、朝議を形成する一員である実万へ入説をはかった知識人たちを、実万は雇い入れていった。それは、息子の教育のためであるとともに、実万自身の本格的な漢学受容のためでもあった。

仁孝天皇「御会」は、兼仁上皇死去後、天保十三年（一八四二）に再開して以降、会説を行うテキストに厳密さを求

めて、「倭御会」出席者全員で校合を当番で行うようになった。つまり、「御会」に出席する公家は「御会」テキストを校合する知識が求められたのである。そのため、公家は、自主的に勉強会を開き、公家の勉強熱が高まったのである。

仁孝天皇は、天保十四年に、公家社会を学問によって刷新するため学習院学問所開講を幕府へ要請した。そして、三条実万が開講の準備にあたるべく、学習院学問所伝奏に就任した。すなわち、仁孝天皇「御会」は、公家らの勉強熱を高め、学習院学問所の開講を実現させたという点で、公家社会に一つの画期をもたらしたと評価できるのである。しかし、仁孝天皇は、学習院学問所の開講を待たずして、弘化三年（一八四六）二月六日に死去した。⁽⁵⁷⁾

仁孝天皇の死後、嘉永元年（一八四八）、実万は武家伝奏に就任した。幕末、清華家である実万が武家伝奏に就任することは、見識のないことであると謗られた。⁽⁵⁸⁾ また、実万は、武家伝奏に就任することは、武門に随従することであり不忠であるという流言がある中、父公修の学問の師である彦峻の「山桃ノ撰喰ハ成リマセヌ」と、何事も帰するところはない同じであるという教えや、父公修が多病であり「勤役」がでなかつたことから、実万が武家伝奏となり、堂上公家を困窮から救済するという決意から就任したのであった。⁽⁵⁹⁾ さらに、実万が議奏であった時、武家伝奏であった日野資愛や、議奏であった勘ヶ由小路資善らが、実万に武家伝奏就任を薦めた経緯もあった。⁽⁶⁰⁾

実万は、武家伝奏に就任以降、経済的に困窮していた堂上公家らを救済するため、朝廷の地位向上を図っていった。⁽⁶¹⁾ そのため現実的な主張を強め、やがて、異国船が来航し、条約勅許問題などが朝廷に持ち込まれるようになると、朝廷改革を主導していくのである。こうした、武家伝奏就任以降の実万の思想については、別稿で検討したい。

注

(1) 「天皇号の再興」(『近世政治史と天皇』、吉川弘文館、一九九九年)。

(2) 藤田覚氏は、光格天皇の御代から、天皇の御前で、漢籍を中心とした書物を読み合う勉強会すなわち「御会」が開かれていたことを明らかにしている。すなわち、光格天皇から仁孝天皇へ御代がかわっても、この文政元年の「禁中有御会」という記述から、仁孝天皇の『貞観政要』を読み合う「御会」が開かれていたことがわかる。

(3) 大塚武松「三条実万」(『中央史壇』十二・十九、一九一四年)。蘇峰徳富猪一郎「梨木神社祭神三条両公御事績に就て」(梨木神社鎮座五十年記念祭奉賛会、一九三五年)、「三条実万公事略」(日本史蹟協会『日本史籍協会叢書別編12伝記三』、東京大学出版会、一九七三年)。

羽賀祥二氏は、「開国前後における朝幕関係」(『日本史研究』二〇七、一九七九年)において、三条実万が、武家伝奏に任じられた嘉永元年(一八四八)以降、朝廷制度改革構想を打ち出していったことについて、実万の「改革の中心課題は祭祀の復活と財政保障の二つであり、神祇官再興は祭祀主体たりうる機構の復興をめざすものであった」と、指摘した。

箱石大氏は、「安政期朝廷における政務機構の改変―「外夷一見御評議御用」の創設を中心に―」(『国史学』第一四五号、一九九一年)において、「議奏・武家伝奏在職中にも、その勤務上の心得方について思案する所があり、朝廷内の職制の在り方に早くから関心を抱いていたことを伺わせる」と、指摘している。

(4) 下橋敬長「幕末の宮廷」二五四―二五五頁、平凡社東洋文庫三五三、一九七九年。

(5) 「忠成公年譜稿」(『三条実万手録』第一、日本史籍協会、一九二六年)。

(6) 東大史料編纂所では、「三条実万公記」は「維新史料引継本」として貴重本扱いをしているが、「実万公記」は貴重本扱いではない。しかし、「三条実万公記」は、表紙をめくると「実万公記」の題名がついている。また、宮内庁書陵部には、「三条実万公記」と同様の日記が、「実万公記」として所蔵されている。そのため、「三条実万公記」と「実万公記」は、元々は同じ「実万公記」であったものを、所蔵経路が違ったためか、便宜上日記の名前を別になっている可能性がある。

る。

- (7) そのため表1には収録していない。
- (8) 以後使用する「実万公記」はすべて東大史料編纂所所蔵である。
- (9) 中橋実『平安人物志』、日本図書刊行会、一九九七年。上田万年・芳賀矢一『国学者伝記集成』東出版、一九九七年。
- (10) 三条実万の思想を明らかにするためには、曾我部式部や村上応助らの具体的な学問傾向を明らかにする必要があるが、現在のところ二人について知ることができない。今後の課題としたい。

- (11) 「実万公記」 一卷。
- (12) 「実万公記」 一卷。
- (13) 濱崎民部権少輔についても詳細は不明である。
- (14) 「実万公記」 一卷。
- (15) 「定祥卿記」 一卷、東大史料編纂所所蔵。
- (16) 「定祥卿記」 一卷、東大史料編纂所所蔵。
- (17) 「定祥卿記」 四卷、東大史料編纂所所蔵。
- (18) 「定功卿記」 一卷、東大史料編纂所所蔵。
- (19) 「定功卿記」 一卷、東大史料編纂所所蔵。
- (20) 「定功卿記」 三卷、東大史料編纂所所蔵。
- (21) 拙稿「学習院学問所設立の歴史的意義」(『京都女子大学大学院文学研究科研究紀要史学編』第二号、二〇〇三年)。
- (22) 下橋敬長『幕末の宮廷』東洋文庫三五三、二六三頁、平凡社、一九七九年。
- (23) 下橋敬長『幕末の宮廷』東洋文庫三五三、平凡社、一九七九年。また、三条家の官位昇進については、笹部昌利氏が三条実美を例として述べている。(笹部昌利『幕末期公家の政治意識形成とその転回——三条実美を素材に——』(『仏教大学総合研究所紀要』八号、二〇〇一年)。

(24) 「後已心院殿中陰中日記」、『三条実美関係文書』(国立国会図書館憲政資料室所蔵)Ⅱ(マイクロフィルムリール 49 二一七、北泉社、一九九八年)。

(25) 前掲笹部昌利「幕末期公家の政治意識形成とその転回―三条実美を素材に―」参照。

(26) 「実万公記」二卷。

(27) 「実万公記」二卷。

(28) 前掲拙稿参照。

(29) 各日記から、天皇「御会」参加年齢を記してみると、野宮定祥二十四歳、野宮定功二十九歳、橋本実麗三十四歳である。

(30) 前掲大塚武松「三条実万」参照。

(31) 早くは、後水尾天皇が近臣とともに「御会」と称する勉強会を開いていたことが、本田慧子氏(「御水尾天皇の禁中御学問講」『書陵部紀要』第二十九号、一九七八年)によって明らかにされている。しかし、後水尾天皇以降は、藤田覚氏(「寛政期の朝廷と幕府」「天皇号の再興」前掲藤田覚『近世政治史と天皇』参照)によって明らかにされた光格天皇「御会」までの間、天皇「御会」について不明である。そのため、天皇「御会」については、今後の課題としたい。

(32) 「実万公記」二卷。

(33) 「実万公記」三卷。

(34) 「実万公記」三卷。

(35) 前掲拙稿参照。

(36) 実万の議奏就任については、大塚氏(前掲大塚武松「三条実万」参照)が、「当時異数の拔擢と称された」と述べている。なお、実万が議奏就任時、「不存寄議奏御役蒙仰恐懼当惑仕候、愚昧ハ不及申年齢漸三十未辨事情重役ナト勤仕難相成義」(『三条実万手録』第二卷、二六五頁、日本史籍協会、一九二六年)と、自ら記していることから、拔擢であったことが知られる。

議奏は、清華家、大臣家、平堂上の大・中納言、参議の中から任命され、定員は五名であった。議奏の職掌は、天皇の意向を、関白を経て職事に命じ、地下官人から職事を経て申すことを関白へ申し上げることであり、朝廷の大小の事件についてごとく相談に与った。(下橋敬長『幕末の宮庭』東洋文庫三五三、二七〇頁、平凡社、一九七九年)。

(37) 前掲『三条実万手録』第二、二六六―二六七頁参照。

(38) 「実万公記」は、日記の残された月を見ると、重要な年中行事が多くある一月が多く書き残されていることが特徴的である。他の月も、何らかの行事がある月や、もしくは、実万自身の昇進や、重要な儀式に参向した時の記事が収められている。さらに、「実万公記」五巻を例として分析すると、文政十年は、正月と八月十日から十二日、同月十八日から晦日、十月は二十一日から二十六日まで、十一月は新嘗祭に関する記述が中心である。毎日の行動を日記に記していた野宮定功と比較すると、実万は、先例として重要な儀式や仕事のために日記を残す傾向が強かったと指摘できる。

(39) 実万に限らず、公家が日記を書く目的は先例を書き残すためである。しかし、実万が日記を記す時は、先祖の日記や儀式書を用いて厳密に考証したうえで記していた。つまり、先例の典拠までさかのぼってその意味を考えようとしていたのである。

(40) 「三条実万公記」三巻、東大史料編纂所所蔵。

(41) 池内大学は、折衷学派に属する儒者で、医業の傍ら、青蓮院宮・知恩院宮侍読となり、また、公家子弟を教えた。安政年間、外交問題・將軍継嗣問題が起ると、青蓮院宮や三条実万らに入説し、安政五年八月水戸藩密勅事件でも暗躍、文久三年暗殺された。(日本史籍協会『野史臺維新史料叢書 三十五雑三』、東京大学出版会、一九七五年)

(42) 「実万公記」八巻。

(43) 詳しい出自は明らかにできないが、『三条実美公年譜』(宮内省図書寮、一九五九年)によると、後に実美の儒学の侍講となった人物である。

(44) 小林文広『明治維新と京都―公家社会の解体―』、臨川書店、一九九八年。

(45) 「実万公記」七巻。

- (46) 「定功卿記」 十八卷、東大史料編纂所所蔵。
- (47) 「和御会、続日本後紀可被聞食之由、旧冬被仰下候之處、先日本逸史被聞食之旨更被仰下、抑日本逸史者鴨裕之縣主梨木三位著作、以類聚国史三代格日本紀略公卿補任以下諸書所輯補者也、近代之作殊拔粹之物今被用御会之条頗不思寄事也」(「野宮定功卿記」 三十八卷、宮内庁書陵部所蔵)。
- (48) 「未許向広橋亭、日本後紀御会可被聞食、然而錯謬不少之間可遂校合、依博陸命一昨々年權實門嚴君右大丞等被取□、其後別当加人数、件会久中絶自過日再興連綿有集会、嚴君頃日御不例之間、令断給也」(天保十四年四月十九日条「野宮定功卿記」 三十八卷、宮内庁書陵部所蔵)。
- (49) 「実麗卿記」 八卷、東大史料編纂所所蔵。
- (50) 「実麗卿記」 八卷、東大史料編纂所所蔵。
- (51) 「実万公記」 八卷。
- (52) 橋本家は、野宮家と同じ羽林家である。
- (53) 「実麗卿記」 六卷、東大史料編纂所所蔵。
- (54) 「兵範記」の別書名。平信範の日記であり、全二十五卷。平安時代後期の長承一年(一一三二)から承安一年(一一七二)まで。(『日本史文獻解題辞典』吉川弘文館、二〇〇〇年)。
- (55) 前掲拙稿において、野宮定功の例も検討した。併せて参照されたい。
- (56) 前掲拙稿参照。
- (57) 前掲拙稿参照。
- (58) 「維新前徳大寺実堅公が議奏から武家伝奏になられ、其の後、梨木神社に御祭りしてある三条実万公が大納言の時、武家伝奏になりました、近來清華で武家伝奏を持たれたのは、全く此の二人きりです、其の当時、清華の身分でありながら、武家伝奏になるとは見識のないことちやと、傍から聞きました」(堀口修『臨時帝室編集局史料「明治天皇紀」談話記録集成』第八卷、一八七―一八八頁、二〇〇三年、ゆまに書房)。

- (59) 『三条実万手録』第二、二七一頁、日本史籍協会、一八二六年。
(60) 『三条実万手録』第二、二七一頁、日本史籍協会、一八二六年。
(61) 『三条実万手録』第二、二七〇～二八二頁、日本史籍協会、一八二六年。

〔付記〕 本稿作成に際し、史料閲覧の許可を頂いた東大史料編纂に、末尾ながら御礼を申し上げます。